

今年度の実績報告と今後の計画

1. 触覚を活かした新たな観光手法の提案¹⁾

私たちの観光は、圧倒的に視覚中心の見る観光である。見たことで「わかった、体験したつもり」になることが多く、実はその場に存在する他の多様な観光要素を見落としている。本研究は、視覚障がい者の視覚によらない“触覚”を用いた観光手法を発展させることにより、晴眼者も視覚障がい者もより楽しめる新たな観光手法の提案を目的とする。2013年度に実施した①触る観光の手法と魅力を探るための視覚障がいの方の観光動向調査と②新たな観光ツール試作品の評価実験の結果をもとにして、だれもが触る観光を楽しむことができる“触れあるき東大寺”が完成した。“触れあるき東大寺”は、2つの地図（知識の地図、感性の地図）と6枚の感触シールよりなる。知識の地図は歴史的な豆知識と“触りどころ”を示した地図、感性の地図は浮き出した点のみで大仏殿内の配置図が描かれた白い地図である。使い方は、大仏殿内でみつけた感触に似たシールを感性の地図に貼っていく。触ることでじっくり空間や物質と向き合うことで新たな気づきが生まれる。評価実験のアンケート結果からは、視覚障がい者にも晴眼者にも楽しめるツールであることが確認できた。今後は、バリアのある場所やバリアフリー設備のある場所を示すだけのバリアフリーマップではなく、五感で楽しむ視点を加えることで、豊かで多様なまちの魅力発見マップとなるような地図づくりを検討する予定である。

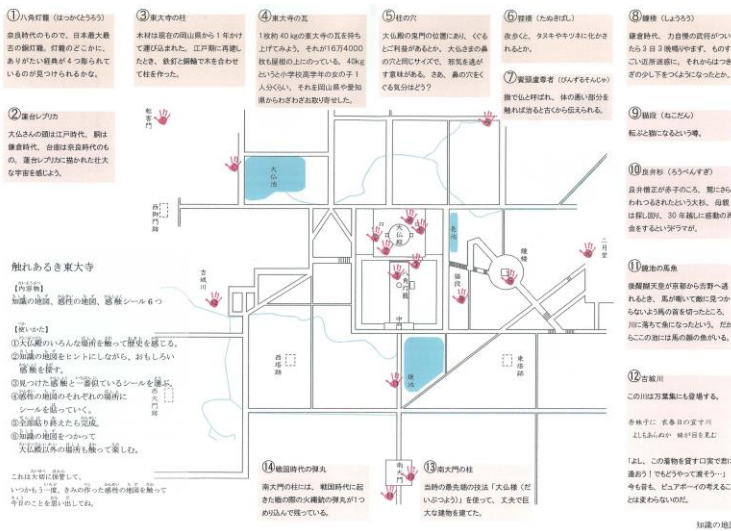


図1. “触れあるき東大寺”知識の地図

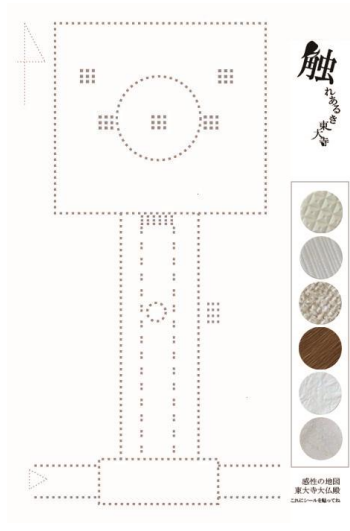


図2. 感性の地図と感触シール

2. 階段室型住棟1階住戸のバリアフリー整備に対する動作検証による評価²⁾

公営住宅においても、バリアフリーの配慮は一般的になりつつあるが、財源不足や耐用年数等から、今後も修繕しながら住み続ける階段室型住棟は多く存在している。本研究は、

既存階段室型住棟の1階住戸を車いす使用者対応のバリアフリー整備住戸の使いやすさを動作検証により評価し、今後の展開に向けた整備課題を明らかにすることを目的とする。

2012年～2014年にかけて行った調査結果により得られた知見は以下の通りである。

1)設計時点：実際の使用場面の想定不足による不備も多く、使い方の理解を図る。建築部分のみではなく敷地全体の繋がりを意識して計画する。2)施行時点：設置位置の不備により使いにくい事例も多く、施工者への知識普及が不可欠。3)設備設計：キッチンや浴槽などは設備機器開発メーカーによる改善が必要であり、今後の改善が望まれる。4)車いす対応の視点のみではなく、聴覚障害などのその他の障害への配慮を付加する余地も多く、今後も検証を続けながら更なる改善が望まれる。



図3. 動作検証の様子

3. 英国の精神障がい者のための居住支援システムに関する調査

日本では精神障がい者への居住支援は特に立ち遅れている。居住の場を施設から地域に移行するには、居住環境整備と質の向上に資する研究が必要である。今年度は先進事例として英国バーミンガムでの居住支援システムについて視察とヒアリング調査を実施した。

英国では、症状にあわせて多様な住まいの選択肢があり、専門家の助言を得て家族や当事者が選択できる。住宅は、寝室とリビングが別に確保されるなど住環境としての配慮がある。また、手厚い家族支援により、再発率低下や安定した生活の継続が実践されている。

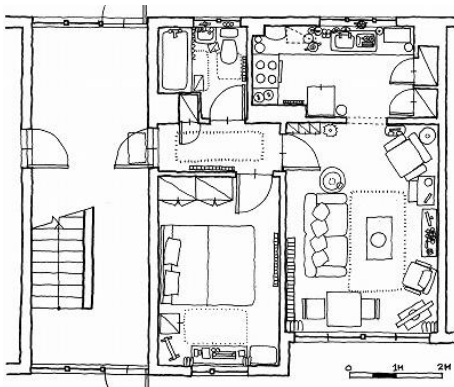


図4. 公営住宅に住む当事者さんのご自宅の様子 (左：間取り、右：リビングの様子)

[文献]

- 1) 室崎千重, 触る観光を楽しむ地図, 都市計画, vol.63 No. 4, 1頁, (2014).
- 2) 室崎千重, 趙玟姪, 三谷信之, 難波健, 階段室型公営住宅のバリアフリー整備への動作検証による評価と課題, 日本福祉のまちづくり学会第17回全国大会(広島県), 発表論文集 CD-R (2014).
- 3) 室崎千重, 集合住宅団地の再生と高齢者の住環境, 後藤・安田記念東京都市研究所, 都市問題, 第105巻第4号(2014).